

真栄里（旧高嶺村）

宮城

聡

時 一九六八年五月九日  
場所 国吉真孝区長宅

氏名 現住所  
国吉真孝  
比嘉樽一  
伊敷亀助  
玉城千代  
島袋勝子



概説

座談会の終りで、遺骨について委しく話し合せて貰った。遺骨収集には、部落全員が三日間、総動員して行ない、納骨堂に収め、「栄里之塔」と名づけた。遺骨になっていられる人数について、真栄里部落では、心を配ってなされ、正確に努められたことが、座談会出席の人びとの話でも推察された。国吉区長は、自分の屋敷内と、屋敷の周辺だけから、「栄里之塔」の方へ運んだ遺骨が百十五

体だったとはっきり記憶していただける。屋号、新屋国吉小（国吉真友さん）宅には四十余人の遺骨があったそうで、一屋敷内に平均十五、六体の遺骨があった。部落内、周辺の畑等の収骨は、一万二千数百柱で、その大部分は住民であることを座談会出席者、他真栄里出身の自治体のその方の係りにいる、当時親しく集骨された方などのお話でも、いっちしている。座談会出席者の中には遺骨収集に当って、まるで積み重ねたように折り重って兵火の犠牲になっていった様子を語る方もあった。

栄里之塔は、一九六八年頃までは納骨堂もあつたと思つたがその後、遺骨は識名の中央集骨堂に移されて、塔碑も一時なかったが、最近、永久的の塔碑が建つようになった（昭和四十三年三月、南方同胞援護会の援助によって改装―山城善三著『慰霊塔案内』）。

真栄里部落の一家全滅は、幸いにも六世帯程度であるが八人家族、九人家族から一人しか残っていないという悲しい境遇の人が可なり多くいられるとのことで、平均にして十戸から三十人、即ち一戸から三人ずつが犠牲になっているようである。当時の戸数が大体百八十戸で人口九百人くらいだったとのことだから、一戸平均の生存者は二人で、戦争が終つた時に生残ることができたのは三百五十六人であつたらしい。

バックナー中将の戦死が真栄里部落だったからである。そのために、真栄里と国吉両部落に対し、米軍が盲滅法に住民を爆撃して大量殺戮を行なったという話が伝わっているとのことだったが、われわれが調べた結果、それは全然無根のデマだったことがわかった。真栄里の本部落は、バックナー中将戦死以前に住民は全部いな

かつただろう。占領地区になつていりし、バックナー戦死の六月十八日以後、前面の田原屋取りは広い地域に人家は少なく、ほとんど人がいなくなつたことを、座談会出席者たちが語っている。

真栄里も、年老いた琉球松の美しい並木や森や林があつたことは、沖繩中の各部落と異なつてはいなかった。それが、やはり戦争の爆撃を主とする伐採で切り倒されて、失なわれた。これは案外人の心に止まっていなない大きい損失である。伐採をのがれたものも艦砲やその破片で倒され、或いは枯死させられた。松は艦砲に弱いといわれている。

解題でも触れたことであるが、七百人、八百人を入れることのできる自分等の壕を、敗残兵に奪われたことも南部一帯の他の部落と異なるところがない。住民が五人から三人の割で犠牲になつているのはもっぱらこの敗残兵に壕を奪われたことによると見ていいだろう。

国吉真孝（二十九歳） 第二次防衛隊

糸満の後の壕に集合して、そこに三日いましたが、あちこちへ配置されて、自分たちは東風平村の世名城の壕へ配置されました。

向こうへ行きましたら、任務は患者輸送で、第一線、運玉森の後、首里の下、今の試験場のある後のトマ下とゆうところから、東風平の陸軍病院へ運んでいました。

大抵自動車十台くらい連らねて行きましたが、五日目くらいの時ですか、南風原の国民学校の前の三叉路で爆弾が落ちてすな、

その時は九台だったと思うんですが、その中の二台やられましたよ。その時は十三名戦死しましたが、毎日四十名くらいは戦死してました。

その翌日、この南風原の三叉路がまた爆弾でやられて、自動車が一か所から通るようになっていましたよ。その時に、同じ友軍で順番に通るのですが、喧嘩みたいに先きを争いますよ。どこの部隊でも。みんな自動車から下りて、後を押して、道には甘蔗なども折つて来て敷いて、通り抜けさせるわけですが、自分は、どの部隊も同じ日本人だからと思つて、余所の部隊の手伝いをしたんですよ。そうしたら、君はなぜ余所の隊の手伝いをするかと云つて、小隊長に叱られたことがあります。向こうは友軍のよく往復するところとアメリカ軍がわかるのか絶えず壊されて、石などさがし集めて、道を一時間くらいかかつて、直してから通りおつたです。

この患者運びは夜の九時頃出かけるのですが、当時は毎日雨も降っていました、夜出かける時には、直撃当って下さいと心の中で願っておつたんですよ。生きた負傷した人たちは、ウジが出てですね、恐かったですよ。恐がると云つて、兵隊に叱られましたよ。恐がるなど云つても、どの人の顔を見ても恐いのですよ。足がなくなつている人もいれば背中をやられている人もおるし、そうしてみんなウジが出ていますよ。

そうして一度は、アメリカに道が壊されて朝の八時頃になったんですよ、六台に患者を載せて帰る時ですが、トンボが上空で一回旋回したんですが、そうするときに迫撃砲が飛んで来たから、みんな車から飛び下りてあっちこちに隠れましたが積んでいた患者も

動ける者はみんな自分で下りていましたよ。その時は五人ぐらい死んでいたですね。飛行機は、自分たちがみんな死んだと思っただけでしょう、帰って行ったので、自分たちはまた道を直して帰ったことがありましたなあ。その時は、自分たちも明日の命は、どうなるだろう、とみんなそういう気持ちだったですよ。アメリカの迫撃砲は、道路の真中に、パンパンと五十メートルぐらいずつ落ちるんですよ。また先きの方も同じく五十メートルぐらいずつパンパンと落ちるんですよ。

野砲ですかね、三十名ぐらいで、縄で引っ張って逃げて来るのをアメリカのトンボに見つかって、相当やられたんですよ、その時も自分等は、甘蔗畑に隠れていたんですよ。

自分たちは、約十五日はこういうふうに通したが、世名城の壕から、祖慶隊そいというて、大里の方ですよ、その時の班長は。その時、自分たち三名は伊敷の壕掘りを命令されて行っていたが、戦争がまあ、その当時は、運玉森から来て、津嘉山あたりまで来ていた時だと思えます。そして自分たちの連中は馬乗りで、その壕がやられて、十名ぐらいは逃げて来たんですよ。

運玉森の下から南風原へ運搬するが、道は一つです。自動車を止めてある道へ出るまでは、担架で二名ずつで乗せて来るんですよ。その時は雨ですべて泥道でぬかっているんですよ。そのぬかるみの道を自分たちは、ふうふう転んだり起きたりして、大抵九時頃(夜)から始めて、トラックに乗れるだけ乗せて、早い時は二時間ぐらいですが、手間取る時は四時間もかかりましたね。担架で担ぐところは遠いですからね、山の谷底から来ますからな、首里の城の下、運玉

とりいます。家内は、逃げて来た兵隊さんが、みんな壕を追い払いますよという。出て行け、軍が利用するからと行って。

その時は、軍曹と伍長と兵長、三名が自分のところに来て、「おい、これは軍の壕だから、君たちはすぐ出て行け」といいましたので、「いいえ、これは自分たちが掘ってある壕ですから、軍が掘ってあるではありませんからここに休ませて下さい」といったら、「それでは、貴様は軍の命令を侵すか」というので、「いいえ、軍の命は侵しません、自分は今患者輸送で世名城の壕から夜はまた首里の方へ行きますよ」といったがきかないですね。

やると行って、銃を自分に向けて構えたんですよ。それから、この手前のちょっと東がわに、武部隊(武部隊ではない山か球部隊と思う)の方が、墓場にすんでいたので、その兵隊が「これは逃げた兵隊だから追払いなさい」と自分に言いおっただんですよ。そして君がやらないなら自分がやると行って、わたしに手榴弾を取ってやるというので、やりなさい、と行ったら、やりませんよ。

それから「おじさん」というので、「はい」と行ったら、「そこに牛がおるから、貴方殺してわれわれに出来ないか」というので「自分ではできませんから兵隊さんで殺して、自分の家族にも下さい」と行って、「これは弾が強いから晩になってしよう」と行って、軍と手を取って、お互いに協力し合ってやろう、といわれました。

また隣りに儀間小と行っておばあさんがおられたですよ。その方は、この兵隊が壕から出すと行ってですね、「貴様はこの壕から出なさいとすぐ撃つぞ」といわれて、このおばあさんは自分のところ

森の近くからすな。十台、一遍にはできないですよ、あちこちにトラックは止っているが、機銃弾がヒューヒューと来ますよ。約二千メートル先きは第一線の戦争ですからね。百メートルを歩くのに約三十分ぐらいもかかりましたよ。その時は、真直ぐに行ったら五分間ぐらいで行くところを半時間ぐらいかかる時もあります、隠れたり止ったりして。

最後のこれまでという時はですね、東風平の前ですね、そこで相当にやられたんですよ。大きなガジマルもあるが、それも吹っ飛んでしまったんですよ。爆弾が落ちて、吹っ飛んでしまってみんな泥だらけで下に隠れて、自分もここをやられて土で、自分では死んだと思っていたんですよ。五分ぐらいしたらみんな無事で命があったと笑って帰って来たんですよ。

その夜ですよ、また大雨で、道路の修繕に行っただんですよ。部落の石垣ですね、それから民間の破れ飛んだ屏ですね、道に散っているのを片付けて、直したんですよ。そうして昼は、自分も家内が生れて三か月経っている子供をつれてるので、これをどうするか、と話し会おうということ、付近の人たちがどうなっているかというところで、廻って見ることにしたんですよ。そうしたら、八十歳になる呉我のおじさんと、自分の家内と子だけが部落にいたんですよ。

最初に自分たちの壕とは五十メートルばかり離れているが、呉我のおじさんのところへ行っただけで、どういうわけで、部落の壕には人がいないのか、みんな何処にいきましたかと訊いたんですよ。そうしたら、「みんな兵隊に追われて南の方へ行った」といいますので、そうですかといっって、自分は、自分の壕に行ったら、家内はひ

来て、「助けてくれ、自分の壕をこういうふうに出すから貴方で相談してくれ」といわれるので、「兵隊さんは決して殺すようなことをしませんから、この壕から出たら死にますからね」と行って自分の壕に帰したら、この兵隊が髪を掴まえて引きずり出しましたよ。そうしてほんとに撃とうとしますので逃がしましたよ。

それからこういうこともありました。読谷の方たちで避難民が大勢おりましたよ。それを兵隊たちがみんな追っ払ってしまったんですよ。自分は、それから世名城に七時頃までに着かないといけないと思っ行って行きましたよ。

その翌日は、また患者輸送をやった。自分ら三名で、国吉真盛と祖慶班長といっしょに伊敷の方に穴掘りに来たわけですよ、それで家族はみんなどうなっておるかを見て、また雨の壕へ行って、みんな元気だという話も聞いて、そういうふうにも壕掘りに行っているんだん戦争が激しくなってますねえ。その時わたしは、今山形の塔のあるところの壕へ行きました。部落の避難民がいると思っって、見て来ようといった軽い気持ちで行ったんですよ。

この壕は、真栄里、田原(真栄里のはなれ部落)の両方の宇民が共同で整備してあった自然壕で五百名ぐらいは無理しないで入ることのできる壕で、長谷准尉がつれている兵隊と民間人がここなら安全だといっしょに入っていました。

それでわたしは、ただ、深い考えもなく壕へ入ったら、一人の兵隊に、少尉だったですがね、「貴様は何でここに来たか」と言われたですよ。それでわたしは、「ここは自分たちの部落の壕でありますから、避難民はみんな、ここにいますと思っって来ました」

「貴様は誰の案内をやつてどこへ来たか」

「いいえ、誰の案内もして来たわけではありません」といって自分を出て行ったんですが、その翌日は、伊敷方面で壕を掘つて、いましたら、戦争があまり激しくなつてですね、高嶺方面から戦争が来た気がするんですよ。もうこの戦争は駄目ですから逃げろといつてですよ、それでも、防衛隊は、それから、三日ぐらいは伊敷の方面へ穴掘りに行ったんですが、それで戦争がずつと近寄つて来たから、自分たちは、まあこれ近いに解散する筈だから、と話し合つて、逃げたですよ。

その途中で海軍の兵隊がですね、飛行場はみんな逃げたが、また入れるといつて、戦さはみんな自分また西に引返すはずだ、といつたんです。「そうですか、そうしたら、当分戦さは西に引返しますか」「はい、自分たちも西へ行くんですよ」と海軍の兵隊がそういうたんです。「そうですね」といったら、「ここにカンパンがあるからあなたたち食べなさい」と言つて自分たちに食べさせたですよ。「これをもつと食べてもいいですか海軍さん」といったら、「はい、自分たちは今晚帰るから、あなたたち食べなさい」と言つてわたしたちにくれました。

それでわたしたちはそれを担いで歩いてると、陸軍の上等兵に行き合つたら、その上等兵がですね、「貴様はこのカンパンを誰の命令で担いでいるか今泥棒をやつて来たんだな」と咎めるんですよ。それでわたしは、海軍の兵隊から貰つて来たんですよといつたら「誰から貰つたか」とえらい剣幕なので投げ出して三名共帰つて来たわけです。

帰つて来たものがおつたが、もうここにおつては駄目、早く逃げなくては……、といつて自分は、自分の家族をまとめてほかに逃げたんです。われわれとまた真壁の方の三個所に……、その途中に大里の防衛隊が後から、(その後を国吉さんが引き取つて話される)。

これは安里吉次郎といつて、同級生だったですよ。その方が約三百メートル後から、防衛隊の服を着ていたが、背後から胸を貫通されたんですよ。

(われわれは真壁に向かつていましたがね、あれは伊敷から来る兵隊だった、後からやられたから背後はほんのちよつとで、小さかったです。それで豚脂を持つておつたんですからそれをつけてですね、治療して繃帯で巻いて、真壁の部落の近くで、その辺に家はないかというのです。)そこには家はないからね、お前は、この松の木の陰に休んでいなさい」といったが、もう自分等は、あれに構つてゐることはできないし逃げるのにせいっぱい)。弾はですね、雨のようにピュウピュウ来ますよ。運がよかつたんですよ、二十四名誰も当らなかつたですよ。それで真壁の方へ行こうとすると、そこにいた兵隊が、「あなたがた真壁へ行くともみんな死ぬよ、喜屋武の方へ行きなさい」といっているので、喜屋武へ向かつて逃げたですよ。

喜屋武へ逃げる途中、迫撃砲でやられたですよ。その時は、真暗になつて何もかも見えなくなつたですよ。そうしてそこでも助かつてですね、誰も怪我はやらなかつたんですよ。それは山城でしたかね、山城で日が暮れて、水が欲しくてですね、真菜里の方が一人い

それで戦はこの辺に明後日頃に来るから南の方へ行こうといつて、おじいさんがた、自分たちの部落民みんな、三百メートルくらい向こうの何か所に集まつて壕を掘つたわけです。その時、隣りの小さい壕に糸満の人だったんですがね、直撃当つてですね、自分たちの壕は半分くらい掘つてあつたが、それが壊されて自分の三男(三番目の弟のこと)が埋められていたが、これを掘り出しました。糸満の方がたは直撃でみんな死んだわけですよ。それで一か所に集まつて、葬式だといつてやつていたんですよ。

そうしたら清輝さんがですね、「おい、戦は真菜里に来ている。あなたたちはここで我慢できるか、喜屋武まで逃げよう」というんです。自分たちは二十四名だったんですよ。「そうか、ここまで来てアメリカに見られてはかなわん」とみんな思ったんですが、もう後の方に迫つていたんですよ。それは朝の八時頃だったんですよ。その時二十四名が急いで真壁の方へ逃げようとしたんですが、約二百メートルくらい後の方からは、機銃弾でしようね、ピュウピュウと集中射撃が来ていたんですよ。やむをえず道のそばの溝にみんな入つてですね、約三時間くらいそこに隠れていたんですよ。あんまり激しいので、東の方へ行こうとしましたが、東の方は戦車が十台くらいで火を出しているんですよ。それで向こうには行けないで、三時間くらい溝にいたのです。

これはいっしょの参加中隊でしたが、一人は大里出身の防衛隊がいっしょになつていたので。

註、他の人の発言、その溝の上に機銃をやるんですよ。それでそこの中に入つておつたんですよ。ところが儀間という兵隊から

たんですよ、新里次郎さんが。その方がどうですか、水を飲もうではありませんか、といつたんですが、水一滴もありません、山城の部落は。それで新里次郎さんに、どうですか、二人で汲んで来ようではありませんか、と話をしましたよ。でも二人行つたら命はあるかどうかわかりませんが、大丈夫ですか、といつたら大丈夫だといふ、そうして二人行つたんですよ。その途中であんまり迫撃砲がひどくてですね、それで山城の小さい牛小屋みたようなところに隠れたんですよ。

そこに兵隊さんが腹をやられてですね、生きていますんですよ。助けてくれ、水を飲ましてくれといふんですよ。新里次郎さんは、この兵隊のすごい怪我を見て驚いて逃げたんですよ。「大丈夫ですよ、自分たちが水を汲んで来ますから待っていなさい」といって自分も逃げたんですよ。

そうして一斗罐を担いで、二人で、アシカーガー(足カー川)といふところに、水汲みに行つたんですよ。そうしたら、その井戸に人が十名くらい死んでいるんですよ。それでまた向こうに行こうといつて行つたら、また向こうも死んでいるんですよ。これはどうするかね、井戸はどこもか人が死んでいるし、といわれるので、「いいですよ兄さん、まあ、こちで汲んで行きましよう」、「そうか、戦だからこちで汲んで行こう」といって、死体の前から汲んで行つたんですよ。自分たちの家族のいるところまで五百メートルくらい離れていましたが、四時間くらいかかつていたんですよ。いっぱい汲んで行つたが、あつち行くまで三分の一くらいしか残っていないんですよ。あつち止まりこち止まりこち止まりしてやつとみなさんに水を

あげたんですがね。

それから道路の暗渠ですね、そこに隠れていた人が三十名くらい焼き殺されて死んでいましたよ。それで危険だから浜辺へ行こうと行って、行く途中、あまり弾が激しくて、阿檀ですね、めいめいの家族が阿檀の中に隠れたですよ。そこで自分のお父さんが破片でやられたんですよ。ただ言葉は、「やられた」と言われただけで、亡くなって、それで葬って、それで持っていた食糧は全部捨てたですよ。自分のお父さんがやられてしまったので。それからまた、逃げた、東辺名(旧喜屋武村)の手前に行っただけですよ。そこもあんまり追撃砲の弾が激しいので、東辺名まで行かない前の東の方に隠れて、それで日が暮れたから、今度は飯を食べないといけないので、そうして水がないと米を洗うこともできない、今度は、他の人といっしょに東辺名の川に行ったら水が濁れて何も無い、それでまた足カ川の川に行って水を汲んで来て、飯を炊いて食べ、夜が明けたので、喜屋武の具志川城という所がありました。こっちは東に行ったら、弾が全然来ないので、いいところだと喜んでおりました。そうしたらまたバラバラ来ました。それでこっちでもいかなから、浜の方へ引越したらどうか、ということで今度は浜の方へ行きました。

註、同席者 あそこは追撃砲も何も来ない、非常に安心しておれました。

その前、東辺名の向こうに行ってお父さんが亡くなった際ですね、あんまり弾が激しくて、松の木が破片で伐り倒されるのが凄いです。その時子供を負んがした女の方が、自分の後に棒立ちして

そうして、呉我のおじいさんの家族とわたしのいとこの家族は、飯も何も無いで食べ物三日間何も食べないですから、「もう我慢できない」といって上に帰って行っただけですよ。その時に米満の園場さんが「おい真孝、お前たちここで死ぬか、またほかへ行くか」といったんですよ。それで、「はい、自分はここで死にますが、ここで状況を見てから死にます」と断ったんですよ。そうして二家族は出て行っただけです。自分は、すぐ下は浜辺ですから下りて行って、手も洗って顔も洗って祈ったわけですよ。ここで死んだ方がいい、と祈って、まあ飯もないし、子供も可哀想だから早く死んだ方がいい、と思っていました。

ちようどその時に曙部隊の兵隊さんがいましたので、「兵隊さん、自分は困っておるんですよ、何も食べさせないものないし、(自分で)自爆して死のうかと思っただけですが、どうでしょうか」、と聞いたんですよ。そうしたら、その方が、「米一升はありますからね、これをあなたがた食べてくださいね、状況見て自分たちが委しいことをまた話に来るからここに待っていなさい」といって米一升をくれたんですよ。それで喜んで、「有難う」といって「これは命の恩人ですから」といって頂いて、持って行って、それを炊かために水汲みに行っただけですよ。そうしたら、朝鮮の人らしい兵隊だったんですけど、おばあさんたちから奪い取ってしまったんですね、帰って行って見たら、もう無いですよ。それでわたしは兵隊のところへ急いで行っただけです。そうして、兵隊さんから頂いた米をほかの兵隊さんに取られたことをいったんですよ。「どんな兵隊が取ったか」「わかりません、自分は水汲みに行っていたので、班もわかり

いたので、「あれ、おばさん、恐いから、そんなに立っているとすぐやられるよ、ここにいいところがあるよ」といって、自分が隠れていたところに「おばさん、ここに隠れて下さい」といって、そこに隠れさせて、自分は松の木の下へ行っただけですよ。そうしたらそれから間もなくですね、そのおばさんが後からやられて、そのまま(即死)ですよ。「ああ、可哀想なことをした」と思いました。自分と入れ代ってやられたんですよ。自分は、このおばさんが立っているの、かあいそうに思っただけで上げたんですよ、自分は何ともいえない、すまないような気持になったんですけどね。

それから、ここにはいられないといっって、喜屋武岬へ二十四名の家族たちが行ったんですが、そこに行ったらですね、水もあるんですよ。小さい岩があったので、そこへ隠れていたんですが、アメリカは船をですね、五十メートルくらい先きまで近づけて来て、「命がほしかったら港川へ行け」といって放送していました。その時に自分の妹は看護婦で兵隊さんとそれまで行動を共にして来ていたんですが、自分で薬を飲んで死にました。それで自分は「えらいことをやったな」と涙を流してですね。兵隊さんから貰って青酸加里を持っておっただけですよ。

妹が、死んだのは、わたしの長男が生れて三か月になっていましたが、みんなが三日間、全然食べ物食べていなかったんですよ。それで「自分が死んで、必ず長男を助けるから、わたしはここがいい死に場所である。上の方にはお父さんもいるから」と涙を流していましたので、わたしは、「いや、お前はわたしが助けるから心配するな」といったんですけど、死んだんですよ。

「ませんよ」といって、まあ三名でさがそうといっって、さがしたが無かったですよ。これは残念といっただけです。

その時海上戦車がやって来たわけですよ、まあ夜が明け初めて、その海上戦車は自分たちのいるところから三十メートル下ですからね。自分たちは岩の下に砂を被ってそこにいたですよ。

大嶺(旧小嶺村)の方が二人いたですよ。その人たちのところには、何十人という人が死んでいたんですよ。自爆やった兵隊ですね、二人手榴弾を口に当てていたが、首は無かったですね。この大嶺の方は、洞窟が無かったので、死んだ人間を被って助かったですよ、二名、一人は国吉という名でしたが、一人は意地(勇氣)が強い、一人は臆病だったですよ。この臆病の方は、後では、人間被るのは厭がったですよ。臭くてですね、それで、おい命は助かった方がいいよ、被りなさい、というのと、「隠れるところがないから、自分はここでいいよ、まあ、一日命助かったらいいよ」といってましたよ。

それから、意地の強い国吉は、毎日飯を食べないではいられないから二人で芋掘って来ようでないかというので、上にあがって、二名つれだつて芋掘りに行っただけですよ。二百メートルくらい上に行っただけですね、そうしたらそこは全部焼かれて、しまっているんですよ。そこにはあちこちに電波ですね、線が張られている。「この線ちよつともさわったら二名死ぬよ」と自分はそう話した。それで約三、四百メートル前の芋畑へ行ったら、この一人の者が転んでしまったんですよ。それで照明弾が十くらい上ったですよ。まあ自分たちはそこに倒れて、死んだ振りをして、またこれが消えてから、

約三十メートルくらい前へ行って手を掘って、帰って行って潮水で炊いて食べたら、その手が臭くて、沖繩でいう「イリ虫」が入っていらなくて、とてもまたこういう手を食べる気が起るかとみんな笑いながら、食べたんですよ。

その翌日ですよ。自分の長女がその頃六つ、五つでしたかな、あまり小便が近くてたびたび小便するために、そとに出ていたが、その時に泣いたんですよ。そうしたらトンプロに見つけられてですね。それから一時間くらい待ったら、アメリカの兵隊がいつばい来てですね、出て来い出て来い、といってやられたですよ。自分の三番目の弟の妻がですね、パンパンと撃たれ怪我して、二か所、足をやられたんですよ。その時、自分は手榴弾二つ持っておったですよ、「おい、こういう場合にはアメリカの弾に当たって死ぬよりは、自分の弾に当たって死ぬ方がいい」といって、自分たちの家族、「おばあさん（自分の母親）も思う存分話もやれ、まあみんなタオルを持ってここに来い、」と行って、みんな顔を合してですね、自分は安全栓を取ってですね、みな自爆やるからといって、みんな涙を流したですよ。「大丈夫、みんないっしょに死ぬから大丈夫」といって、この人もこの人も手榴弾の安全栓を取ってですね、やることになった。ここは自分の三番目の弟の妻、こっちは自分の家内がですね、「止め、アメリカの兵隊は、もう弾がないそうだから、アメリカの弾を少しでも損させよう、それでアメリカの弾に当たって死のう」という。「君たちそういうが、貴方が死ぬかわたしが死ぬか、誰か一人残ったらどうするか」と自分が言ったんですよ。「それでいい」と、「そうか」といって、手榴弾は安全栓を取ってあり

それで兵隊が恐くて、後のおじいさんのお墓へ行っただんですよ。そこへ行ったら、そこに糧秣からアメリカの煙草なんかが沢山ありますよ。それを沢山担いで、またそこは恐いので帰って行きましたよ、大きなスキの根元（場所は国吉部落と真栄里の中間、と国吉区長の奥さんが口をはさんだ）に家族六名隠れたんですよ。そこにアメリカ糧秣は沢山ありますが、開け方がわからなかったの、刺刀で切って食べたわけですよ。三日間、塩からい糧秣ばかり食べて水がほしいんですよ、溝水を汲んで飲んだんですが、そこには死んだ人があちこちに倒れておるんですよ。銀唾もたかっているが、それも構わずに汲んで飲みました。

そこに三日いて、ここにもいられないから自然洞窟へ行こうと考えて、自分のうちから蠟燭を持って、燐寸もって、水筒は死んだ兵隊から二つかっぱらって両方の横腹に下げて、家内と三番目の弟の妻には、「自分は自爆するから」といったら、弟の妻が、「あなたに手榴弾持たすと、いつ死ぬかわからないから」と取り上げられた。また自分の母親が「お前一人やると危い、わたしも行く」といって追って来ました。

そこへ行ったら、わたしは十名くらいの友軍の兵隊につかまえられた。物も言わさないんですよ。そこで北郷大佐、少佐、連隊副官の前ですね、「自分は決してスパイではありません、軍のことも立派にやりましたから、スパイではありません」といってもきかないですよ。それで好きにやっただけ、と頼みました。「それではお前は希望がないか」「はい、自分は、早坂隊長、長谷准尉に、国吉はスパイと誤られて処刑されたと言ってくれますか、よろしくお願

ますからね、向こうに置いてですね、「今晩にうちへ帰るから、誰でも負傷したら、ここに捨てて置くから、みんなその時は、自分で自爆ができるか」と自分は泣きながらいったんですよ。それでみんな「大丈夫だ」、というので水も腹いっぱい飲みなさいといっておきましたですよ。それで、水も飲んで、晩の九時頃ですね。その時晩部隊の兵隊さんがですね、「なぜあなた方命を無駄に捨てるか、命は、一分間でも一時間でも余計あった方がいいよ、あなたがた地方人が命を捨てるのは無茶だよ、自分たちが情報を偵察して来るから休んでいてくれ」といってさとされたんですよ。その方たちから、そういうわれ、また情報も聞いて、それからまた三日くらいいたんですよ。

そうしたら満潮の時には戦車が来て、パンパンやりますよ。自分たちの頭の上から弾は飛んでいますよ。それで、戦車が毎日来るのでここは逃げる方がいいと相談して、ここから出て行きましたよ。その直前自分等に、アメリカの兵隊が手榴弾二つは投げましたよ。しかし助かって、自分の部落へ帰ることにした。波平まで来たならアメリカの兵隊が大勢いたので、また引返して真壁の方へ行って、それから新垣へ行こうと行って、今の白梅の塔のところへ来たところから戦車があつたんですよ。そこに友軍の兵隊が大勢いたですよ。そこに二晩いたんですよ。そうしたら友軍の兵隊が、「おい、君たちは、ここで子供をそんなに泣かしたら、君たちの命はないよ、今で帰らないと駄目だよ」、といったんですよ。それで、「そうですか、自分たちは、自分たちの洞窟があるから向こうへ行こうと思つて、行くんですが」といって、そこから一旦帰って来たんですよ。

いします」といったわけですよ。その時、長谷准尉がそこへおいでになつてですね、向こうの部屋、二十メートルくらいのところから出て来てですね。「元氣だったか」、と行って長谷准尉と握手やっただですよ。「はあ国吉、元氣だったか」といって、まあ、自分も蹠がボウボウだったんですよ。

長谷准尉が「国吉君は決してスパイではありません、宜しく御願いします。国吉のことはあくまで自分は信用しています」と頼んだわけですよ。それで喜んでですね、手を取り合つて。そこには看護婦さんが大勢いたんですよ、沖繩出身の。自分の親戚もそこにはいたんですよ、真次郎といつて。手を握り合つて涙を流して、また自分が知った兵隊も四、五名いたですよ。まあ元氣であつたか、といつて、ここで約一時間くらいこれまでの自分のたどつて来たことを話し合つた。アメリカ軍はどういうふうになって、戦争をしているということなどを。連隊副官はよくわかつていた。しかし家族を連れに行くといつと、また疑がわれた。それで「もし殺すなら、自分の家族がここから約二百メートルくらい向こうにおりますから全部殺してくれ」と頼んだわけですよ。よしといつて、そうならいっしょにやるからといつて、また長谷准尉がいるいる事情を聞かされてですね、軽機関銃を持って、自分を五十メートルくらい前にして歩かして、もしアメリカ軍隊と通じていたら殺してからみんな逃げるという考えだったんですよ。そうしたら自分の家族は逃げていない、そこにはいないんですよ。これは大変なことになったと思つて、約三十分くらい大声で呼んだら、出て来たわけですよ。それは、話し合いで、こういうふうをやつたといつて、兵隊といっしょにその壕に入

ってですね、いろいろ事情を聞いたらですね、この壕はですね、アメリカが、水攻めで水で死なすといつて（米軍は壕内に水がないと考え、水欲しさに友軍は降伏するであろうという意）それから爆雷かけて、一週間テント張ってですね、爆雷かけていたが、それが帰った翌日だったわけです、自分が行ったのは。それでスパイといつて誤解されたのです。爆雷で壕を壊わしてしもうんです。今碑が立っているところです。

それから北郷大佐に命令されて行っている話もしたわけでした。「君は防衛隊を逃げたのか」「いいえ、逃げはしません」「それではまた防衛隊に入らないか」「戦負けてまた防衛隊できませんか」とはね返したわけですよ。「それでは、軍の協力はいくらでもやってくれるか」「はいそれはやります」「それではあなたは食糧があるところを知っておるから、やってくれ、家族も兵隊同様に待遇するからやってくれ」というので、「はいやります」と答えて、軍服を渡したが、「これは要らない、戦争は負けたのだから」と自分は、はね返したですよ。

この壕はですね、約五百名くらい、兵隊たちがいられたのではないかと思えます。

註、二百名以内が実数と推定されるが、あの時点では、二百名が五百名くらいと錯覚することも考えられる。戦記で見ると、連隊本部八十名、それに第三大隊が加わっているが、大隊の残存者は大抵百名以下くらいに減っている。しかも、六月十一日から米軍の本格的攻撃を受け、「爆薬攻撃、火焰放射によって、惨烈をきわめ、死傷者多数を生じ……」（『沖縄方面陸軍作戦』六〇七

頁）とあるが、あるいは米軍の猛撃を受けた国吉の壕に逃げ込んでいた第一大隊百名からの残存者も、この壕へ逃げ込んで加わっていたかもしれない、すると二百五、六十名の兵隊がいることになる。それらの兵隊は、壕内深く隠れて生きのびるのに、きゅうきゅうとしていたことが、推察される。

糧採取りに、北郷大佐の証明書を持ってですね、その任務で出るのは、中尉、少尉で、軍曹では駄目だったですよ。そういう将校の方と、あちこち廻って糧採取をさしに行きおったです。曹長でしたが、自分が言ったですよ。「呉我のお墓のところに糧採取が沢山あるので、あれを取って来るとこの壕で暮らすのはいけないから取って来ましょう」と言ったですよ。それで兵隊さん六名と取りに行っただんですよ。この六名は拳銃持たして、自分には持たさないですよ。約二百メートルくらいの距離ですが、約四時間くらいかかったですよ。立って、坐って、立って坐って、照明弾が上るので、自分が大丈夫といつても、きかなかったんですよ。

そこにアメリカの糧採取が沢山あってですね、一人の兵隊さんが、自分に、おじさん、と呼びかけるんですね、はい、と答えたら、ここに糧採取ないし北郷大佐に言おうよ、というんです。帰って行って報告してから、この食糧を確保して逃げようという考えですよ。それで自分は、「自分は絶対嘘は言いませんよ、あるものはあるといひますよ」といったら、「ああ、そうか」といいましたが、それは糧採取を食べながらでしたよ。そこでこの糧採取を食べたら、水が欲しくてたまらないですよ。それで、アメリカの水罐（現在ケロシンを入れて運んでいるものを当時は水罐といつて、米兵はそれに水を容れ

て持ち歩いた由）に三分の一くらい水が入ってあったんですよ。それで自分はそれに粟が入っているかどうか鼻でかき舌でなめて、何でもないと思つたので、兵隊さん水がありますよ、どうぞ。といつたら、それは毒が入っているから飲んだら死ぬよ、というんです。自分は渴いているので飲んだわけですよ。それでも兵隊たちは誰も飲まないですよ、十分間ぐらいい。そうして自分に、あなたはやがて死ぬよ、というんです。自分はまた飲んだわけですよ。三回飲んだから、それからみんな飲んだんですが、兵隊たちは、自分たちは飲まないで、「あなただけ死なして、自分たちはみんな生きる考えだった」、といつて笑ひ話をしましたよ。そうして沢山の煙草を持って、また糧採取も持って帰りました。

その後また、兼城（旧兼城村）の川のところ（国吉さんの奥さんが「座波」と指摘した、その壕から座波は直線コースで三キロメートル余で、道の距離は四キロメートルを越すようである）、座波に糧採取が沢山あったですよ。その糧採取に行つたのは十一名ですよ、みんな拳銃を持って。そこにアメリカ兵が自動車に乗って来たわけですよ。五メートルくらいしか離れていないんです。そうしてアメリカ兵は歌をうたつて、歩き廻っているんです。見つかったら殺されますよ。咳などするとすぐ見つかるし、目は上を見てですね。びっくりして、二十分くらいじっとしていたら車に乗って帰って行つたので安心してですね。それで糧採取の箱を背負って帰りましたが、その途中でまたアメリカ憲兵に大城森（豊見城線廻り那覇、糸満バス線の与座、大里への入り口近くにある丘）であつたですよ、それで弾をバンバンやられたので、またもとの所へ帰つたで

す。追っ駆けては来なくて、誰も怪我もしないで、糧採取も持って帰りました。

そこにいたのは、二十日くらいです。日時ははっきりしませんが、兵隊がですね、「切り込みに行かないか」（この場合は米軍のいるところに物資掠奪に行く意）といつて自分のところに来たわけですよ。「はい、行きますよ、どこですか」といったら、「真栄里の前にアメリカさんが大勢いるから行こう」といって、長谷准尉、カン野大尉、六、七名くらい切り込みに行つたですよ。あの方がたは手榴弾を持って自分は拳銃ばかりだったですよ。長谷准尉は、地方では医者だったんですが、召集兵で准尉だったんですよ。その方が途中で咳をしてですね、そうしたら照明弾の上り方は全く屋みたような、それに弾は機関銃でドンドン来てですね、自分は危くて、仕様がなないのでアメリカのところへ行つたわけですよ。向こうは弾は来ないですよ、それで小さい溝にゆっくり行ってですね、そこにじっとしていて弾が来なくなつてからまたアメリカの手前から伊敷の方に行つて、糧採取を約五十個くらい持って来たんですよ。自分等の家族は、もうお父さんはやられてしもうて、亡くなっているといつて三時間くらい待たされたところへ帰って行って、それでまた笑ひ話になったことがありますよ。

そうしているうちに停戦協定で負けているからと向こう（米軍）は申し込んで来たそうですよ。それで（こゝへ）、日本はアメリカに負けておるそうですからいつ、いつかは出よう、といつて来たたら、「いや、決して負けてはいない」といって、それでここから港川のアメリカ本部へ使が行つて、帰って来ると「ほんとに日本が負けてお

るから出よう」ということになったわけです。その翌日アメリカ憲兵が来て、白い降参旗をあげなさい、見えるだけは助けるが隠れているのは助けなさいといったんです。日本の将校なんか、拳銃なども束にして、一週間はアメリカの兵隊が守っておったですよ。そうして捕虜になりました。八月の三十日(二十九日)に、北郷大佐もみんなです。看護婦は五十名くらい、炊事もいっしょで、それくらいはいました。月の夜で握り飯を食べながら月眺めました。玉音放送も聞きました。

註 国吉さんのお話について、もっと委しくお訊ねしたいので、名嘉所長と共に一九七一年四月四日に、真栄里のお宅を訪ねた。幸い御在宅で、不明の点をお訊きました。

問 「お父さんは埋葬なさいましたか」

答 「破片で松の木が倒れまして、破片で右の肋骨と腹をやられまして、ああ、やられた、これだけです、言葉は。破片の大きさはわかりません。血が出てそのままです。あんまり砲弾が激しいので、岩の陰に隠れていて、それが止んだからスコップで穴を掘って、二時間くらい経ってから葬りました」

問 「あの時読谷の人がいましたか」

答 「あれはですね、自分たち親戚合せて二十四名だったんですが、読谷の人が子供を負んぶしてですね、隠れるところがないので自分の後に子供を負んぶして立っているの、危いですよ、おぼさん、こっち御出なさい、といつて自分は岩の下にいたので、自分は松の下に行って代ったら、このおぼさんは十分も経たないのに、どこをやられたかそのまま、死んでいきました。子供が泣

いていたので、帯をはずしてやって、そのまま逃げたんです。この子供はそこで餓死したでしょう」

問 「海岸へ行かれて、妹さんが、生後三か月の国吉さんの長男を、わたしが助けるといって、青酸加里を飲んで自殺されますが、それはどういう意味でしょうか」

答 「自分たちは自爆するといつて、僕が手榴弾を二つ持っていたんですが、その時はもう薬を飲んでいたので、まだ死んではいなかったんです。それで家族はみんな生きてくれ、家に帰ってくれといつて涙を流していついていきました。自分が死んでみんなを見守ってやるという意味だったんです」

問 「埋葬はやりませんでしたか」

答 「いいえそれはですね、砲弾が激しくて、二十メートル下に海上戦車がおりましたので、戦車の砲弾は百メートルくらい先に落ちて自分たちのところは、落ちませんでした」

問 「沢山の人が死んでいましたね、その時二人の人がいますか、一人は国吉さんといいますが、死んだ人を被って助かるが、あなた方のいるところと、この人が沢山死んでいる場所とは、どんな風になっていますか」

答 「自分たちは、上ですが、死んだ人たちはすぐ下になっていたんです。臆病で死体は臭くて被らないといった方は海岸で死んだそうです。後でこの具志の国吉という人が話していました」

問 「晧部隊はどこにあったわけですか」

答 「すぐ近くの壕で、子供にくれるものがないので食糧さがしに行く時に、同じく並んでいるところですよ」

問 「晧部隊がくれた米を朝鮮の人らしいのが取ったといいますが、どうして朝鮮の人というのですか」

答 「朝鮮の方が三十人くらいいたんです。この人たちは、手を上げて、下の方にいたんです、捕虜されるために。潮につかって、その後から日本の兵隊さんが、パンパン撃っていたんです。アメリカの船に乗るといって」

問 「こっちの壕に來られて兵隊に取り巻かれて捕えられた時、連隊長のところに行かれたのですか」

答 「壕の中の前方です。連隊長に訊問されたので、連隊長のいるところは真中あたりです」

問 「スパイの疑いで、いよいよ処刑されようとした時、お前何か言うことはないか、といわれて、早坂隊長と長谷准尉に、国吉はスパイの疑いで処刑されましたと伝言して下さるようお願いします、といったら、二十メートルくらいさきの部屋から長谷准尉が出て來られたといわれるが、長谷准尉は、あなたがつれられて行くのを見なかったのでしょうか」

答 「部屋が横穴の方にあつたので、連隊長が命令で長谷准尉を呼びましたのです」

筆者は、壕の長さについて訊いた。約百メートルくらいといわれた。真栄里部落とその屋取りになる田原の部落全住民でも無理に入ると収容できるというから百メートルの深さはあるだろう。

降服の日は戦記と一日違つて八月三十日と国吉さんは記憶していられたが、家内が自分より確実にわかるといわれ、奥さんと呼ば

んで同席して貰った。奥さんは、国吉さんの三十日ということを知っていたが、戦記と同じ二十九日に捕虜になった、とはっきり記憶していられた。

問 国吉さんが、危く処刑されようとした時の壕内の兵隊、看護婦、炊事人など人員も奥さんは、百七十人くらいではなかったか、といわれた。ほぼわたしの推定と一致していた。一週間の水攻め(水を飲まさないこと)と爆雷攻撃を受けているので、内部で相当の死者も出ていると見られる。

北郷連隊長(大佐)をはじめ、将兵、ならびに看護婦、炊事婦、壕内民間避難民、それに付近の避難民等が、揃つて、一九四五年(昭和二十年)八月二十九日に捕虜になったが、国吉さん御夫妻のその時の推定人員は、全部で五百名くらいと話合つていられた。

財団法人沖繩戦没者慰霊奉賛会による山形の塔の紹介文に「歩兵第三十二連隊が軍旗を奉持して九月中旬まで勇戦し……」とあるが、戦記にも連隊長以下が武装解除され、捕虜になったのは八月二十九日であり、国吉夫妻によつても、明かに九月中旬うんぬんは間違ひである。また、近寄る住民をスパイの疑いで警戒し、夜間の食糧あさりのみに汲々として、壕内に隠れていた実状が「勇戦し」と形容されている。

比 嘉 樽 一 (三十四歳) 第一次防衛召集

防衛隊召集を受けましてね、東風平に行ったが相当の人が集まっ

ていました。訓辞を受けましたが、そこには一日もおらないで、糸満小学校へ行ったんです。それから壕生活です。われわれは球部隊で、壕は糸満の南、真栄里ですな、そこで海の特攻隊、船舶特攻隊の壕が掘られてあったんです。天川、あみや原というところですよ。真栄里の後の山になっていきますからな。真栄里へ入る前に船舶隊の壕が幾つもあったんですよ。船一つ入る壕ですな。役割りが四つくらいあったはずですよ。穴は深く掘って、柵をはめて、線路も敷いてあったんですからね。タイヤーつきの車に乗せて海へ持って行く。けれども泥のぬかる道ですからね、思うように運ぶことができないですよ。浜辺へ持って行ったら、砂の上ですから砂にめり込んで、なかなか巧いことはいかないですよ。満潮の時ですと、そこへ持って行ってそのまま置いたらいいが、いつも潮の干上る場合に連絡は来ておったですよ。壕にいてもゆっくり休むことはできない。夜の夜中でも連絡が来たら皆出て行くんですよ。出て運搬して、向こうに出して大抵潮が引いておるので船の浮ぶところまで車で持って行って、船を出してまたその車を持ち返して来てですね、壕の中に隠して擬装して、もうそれで済んだと思ったら、上げてくれという連絡が来て、一日に一回くらい。それは毎日が毎日あるわけではありませんが、出すのはよく憶えています、それは五、六回はあったらと思う。でもあの調子から見たら、出て行って向こうまで行くことができないで、戻って来る場合が、多々ありましたね。戻らない時もありましたがね。

特攻隊に関する仕事ですんでは、われわれは東風平の壕に移動したんです。あの壕へ移動して行くころからは、もう首里の方からね。それからまた移動して、具志頭の与座・仲座へ行きました。与座へ行ってからはもう民家ですよ。そこへ行ってからは、小隊長は球部隊の土井少尉、あの方ですから。その時、与座にはもう部落の人はいませんが、どこへ行ったかわかりませんが。

あの辺の状況は見られませんでした、屋中は出られませんからな。夕方なったら飯を取って来たり、飯を食べたりそれくらいの余裕しかないんですよ。また晩の集まりがあったり、いろいろあったり。点呼とかもあったので、なかなか自由に歩ける余裕はなかったですよ。そこでは二、三日あるのは四、五日くらいだったと思うですよ。

それからその部落の上の壕へ行ってですね、山に、もう壕は無いんですよ。今度はいよいよ具志頭部落の与座の後の山の石の陰に隠れた。弾薬運搬もできない、壕がなくてあっちこちに散らばっておるので連絡も取れないですね。今度は退く命令がありましたからな。わたしは向こうから真栄里部落に来てですね。その時は、わたくしの甥も同じ防衛隊におりました。わたしは壕を出ると同時に飛行機から機銃でここやられてですね、もうこれは困ったといつてつかまえて、ドンドン、ドンドン下って来たんですよ。やられたもんだから水が飲みたくなってですね、水飲ましてくれといったが、水は絶対飲んではいかんといわれました。

らは友軍の兵士が引返して来おったんです。われわれは糸満の方から向こうに行きましてね、野砲を馬に引つ張らして、軍のトラックに載せるんです。南へ下って行くんですね。

それからまた玉城村の糸敷の壕へ行きました。糸敷には大きな立派な自然壕があります。そこから那覇(旧真和志村)真嘉比、今の古島ですよ、そこへ弾薬運びです。そこにちよとした即砲の陣地がありましたよ。一回運んで行って、帰ることができません。われわれはカンバン持っていましたから墓の中に入っていました。上には砲の陣地がありますから、アメリカの迫撃砲や、飛行機からも爆撃するんですよ。

われわれは墓の中におったが、友軍の方からも弾は撃ちましたよ。そうですから向こうから激しくやり返すんですよ。飛行機からも爆撃を落したのが幸いにわれわれの墓には当りませんでした。そこに屋中は泊った。アメリカの兵隊は夕暮れ時に煙幕張るんですよ。敵が煙幕を張った時に小隊長が、さあ今だ、といって出たんですよ。そうして皆駆けて上開ぐすくの下に、横切って来たんですからね。そうしたら迫撃で追われておるんですよ。その時に小隊長が迫撃でやられたんですよ。そして歩くことができない。これは現役兵隊だったんですが、本土から召集で来られていた。幸いに担架も付いていたから、担架で壕まで連れて来たんですよ。

それからわれわれが弾薬を運搬して帰る場合に、津嘉山の前の道路は臭くてですね、倒れた人が腹は膨れて、そこは歩きにくかったですよ。迫撃が飛んで来た場合は、低いところをさがして大丈夫だなどと考えて駆けて来おったですよ。道端は死体がいっぱいいます。

飛行機は飛行機でわれわれを狙っておる。それからまた音聞いたら南の方ですね、真壁の方は太鼓をたたくようにポンポン、ポンボンでドンドンドンドン艦砲射撃はやっておるんですからね。それでは今度真栄里部落からドンドン下って来て、やっぱり自分の壕がここにあったですからね、つまり自分の真栄里部落へ戻って来た。それから行くことはできないですよ。あんまり激しい真夜中になつて。

それから自分の甥は真栄里部落ですからね、あれたちの親たちのおるところまでつれて行った。今度は帰るのに、それがなかなか帰られないですよ。わずかな距離ですけれど、夜になってから出て家帰るまで明け方になっておったんですよ。

もう何日になっていたか、わからないですよ。今度は飯食べる筈がないので、外に出て箸をちよとさがそうしたら、破片にやられてしまつてですね、ここ(まま)。疵が残っておりですよ。ここですね、ここに破片を打ち込まれたからもうそれから動くことができなかったです。腫れてしまつてそれから二、三日してから壕の前は擬装してあったが火焰砲で焼かれてですね、それで自分の娘たちも出たから、わたしも出たんですよ。最初真裸で出たが、また引返して姉さんの着物を着て出てそうして子供をつれて行ったんですよ、幸いまた手榴弾一つは用意して持っていたんですよ。そこ出たらこの家の後に小さい丘がありますよ。そこに壕があったんですよ。そこでアメリカ兵が上半身裸になって、小銃をかまえて黒人兵といっしょに、そこを狙っているんですよ。そこは連隊壕だったんですよ。それで蘇鉄のそばに隠れてですね、ここで兵隊に気



づかれて今見られたら大変だと思って、蘇鉄の上から手を出し手拭を握ったんですよ、そうしたら向こうは指吹いて来い来いと合図するんですよ。それで駆けて行って捕虜になったんですよ。

この辺はその頃になると家は全然なかったですからね。人間もここからはなかなか歩かなかったですよ。しかし横切って来ましたが、この畑あたりは、相当に死んだ人がいたですよ。いのちがけですから、何が何やらわからないですよ。

われわれが与座にいた時は民家は残っておったですよ。小隊長は山の塚にいました。

#### 伊敷 龜助(三十八歳) 引揚者

わたくしたちは、昭和二十一年の十一月の半ば頃に帰って来ました。一期、二期と行って団体生活の規格建物がありましたので、二期までの家を作りまして、規格建物といっても合同生活をやっていましたよ。

一斑から六班までありました。一つの規格建物に四所帯くらいずつ入っていました。

わたしたちが帰って来る頃から部落の方が、引揚者に同情しましてさつま芋の配給をやっておりましたよ。もうわたしたちが帰って来る時からは、芋はもうついていて、配給していただんです。遺骨はほとんど片づけられました、畑の中からは遺骨がよく出ていましたよ。

芋はよくできていましてね、多分、亡くなった方がたの関係で芋

はよくできていたのでないかと思えますね。

遺骨の収集は、部落の中はほとんどすんでいました。部落の西がわにですね、ちよっとした自然塚がありますが、そちらに集めてありましたよ。

それでわたしたちが帰って来てからですね、一九五七年頃と思うんですがね、畑の中はみんな集めてですね、部落の西がわに集めてありましたがね、残っていたのが六十余り、入りませんので焼いて灰にしてから入れましたからね。そのまま入れたらとても入れることはできませんでしたよ。また遺骨が三十柱合せて九十柱余りでした。これは戦争がすんで十三年目になっていたのですがね。

#### 五城 千代(二十三歳) 家事

うちの後方には、山部隊の兵舎があって、わたしはたまに炊事や何やで行って兵隊さんに協力することがありました。うちには七十を越えるおじいさんがおりました。うちのおじいさんは、兵隊さんたちとよく喧嘩をやっておりました。沢山芋を煮てあるのですが、沢山芋を煮てあるのに全部あなたたち上げて、自分たちはいつもひもじい思いをさせるのかと行って、喧嘩をするのです。

屋は来て兵隊さんが持って行っても、わたしはおじいさんとの間に立って、上げていましたが、夜から来て芋を炊いてくれと行って、寝ているのを起される場合もあったんですよ。

そうして戦争が次第しだいに激しくなっていく行きましたが、うちは最後まであったんですよ。中頭方面からの避難民もうちに住んでい

たんですよ。家いっぱい、屋敷いっぱい、大勢いたんですよ。戦争がひどくなりましたのでわたしたちは塚にいましたが、家に来るのが危険ですから、そうして区長さんから部落からの立ち退き命令があったので、大里部落(旧高嶺村)のルズンですかね、あつちは。高いところ、あつち避難していたんですよ。避難は親戚が揃って後はどうなるかわからないから一つの塚に入っていた方がいいだろうと行って、みんないっしょにいたんですよ。そうしたらあつちの方で、爆弾がつきつき落ちて来るんですよ。また自分の家の塚に帰って来て、そこでわたしたちは捕虜取られたんですよ。

まあ、大里のルズンというところから、うちのおじいさんは衰弱しまして、夜も夜通して家に逃げていらつしやる時もあったんですよ。屋はおじいさん、トンボに見つかつたらいけませんから塚に入りなさいというんですが、絶対入らないんですよ。いくら塚に入りなさいとおじいさんは、きき入れないんですよ。そうして二、三日来ます芋ははげしくパンパン来るんですよ。それでもいくらおじいさんに塚に入って下さい、といっても入りませんので、自分の塚がいいと行って夜どおしかかって逃げて来たんですよ。戻って来て塚を大きくして入ったんですよ。塚には大勢ですよ、五、六十人です。

その時は、兵隊さんも民間の塚を盗んですね、入って来るわけですから。うちの塚の前に友軍の兵隊さんが怪我を受けて倒れていたので、その前に電話で、若いものはどうしなさい、年寄りはどうしなさい、と知らせがあったので、若いものは奥に入って、老人は

前に並んでいたが、アメリカの兵隊に塚が囲まれてすね、手を上げたんですよ。手榴弾を投げられて、老人は揃って亡くなったんですよ。みんなで十三名でした。中には大勢人がおりましたから怪我を受けた人もあって、そのまま捕虜取られたんですよ。それは六月十六日でそこから伊良波へつれられて行きました。

#### 島袋 勝子(十八歳)

昭和十七年頃から女子青年も動員です。小隊長で石山にハッパかけに行きおったんですよ、何日間と行って、そこに泊り込んで作業するんですよ。小塚飛行場をつくりですね、十七年、十八年です。

それで食糧といつては何もないですね、繊維のあるひどい芋でつくったウムニ(芋をつきくいだいたもの)、それを食べさせるんですよ。それに味噌がないので、潮水でお汁をつくってそれを飲むんですよ。それでみんな我慢ができませんので、家へ逃げ帰って脂味噌をつくって持つて行って、それを食べおったんですよ。それでね。

それで一週間くらい休んで交代で帰ってまた十日くらい行って、つぎは何小隊といつて行つたんですよ。女子青年です。

その間にまた竹槍訓練とかそれから敵が上陸したら敵を越えさせないといつて石垣をつくるんですよ。そうしてそのうちに十九年の何月頃だったかしらん、武部隊が入り込んで来ました。武部隊の栗野隊といつていましたがね、その頃は。そうして最初は事務所とか部落の産業とか、それから陣地構築ですね、その時は。そう

して順番が廻って来たら、三日に一べんくらの割合で、兵隊さんといっしょに飯炊きに出て、飯を兵隊さんのいる場所まで運んで行くわけです。

部落には若い男といってはほとんどいません、すべてが召集されておるのですから。それで女が「日の丸作業」といって何でもやるようになつていました。

また訓練ですね、組をつくって何の訓練でもやることになって、すべてが女ということになりました。竹槍訓練なんか今から考えるとおかしいんですけれどね。司令官ですか、向こうから来るんですよ、それで小学校の運動場で「カシラー右」ですか、そんなふうにやって、竹槍を持ってですね、先は鋭くけずったものですが「敵が落下傘から下りて来たら突くのはこうしてエイツ、ヤアツと掛け声をかけて突きなさい」といっていました。勇ましいような格好ではありませんが、今から考えるとこっけいな感じがします。

註、島袋さんは、宮崎県に疎開して、昭和二十一年十一月に帰郷しているの、これからの談話は、帰郷後の話である。

疎開から帰って来ましたら豆の配給とか、ポテトの配給とかありました、夫婦二人では、どうしても食糧が足りません。それで余所のかたからわけて貰つて何とかしのいでいましたが、引揚げの時に持って来たお金はB円と交換前の日本金の二千円で、もうほとんど遣つて無くなつてゐるわけですよ。それでまだ子供ができなかったから、まあそんなこんなして開墾しながらやっていたわけですけれど、それでもいかないうちから役所に勤めたらということになつて、役所に入ったわけです。

したが、帰って見たら部落の人びとが、よかつたね、と喜んでくれて、向こうで考えていたのとは反対でした。

疎開した人はみんな自分たちは命を助かりに行つて、残された人たちは、どんなに自分たちを怨むだろうとそう思ったんです。

この役所というのが国吉に、艦砲で飛ばされなかった人家があったわけですがね、そこに役所があったんです。そこに勤めたら、最初の月給がB円の二百五十円でした。煙草のラッキーマンが一ボール（紙巻煙草二十本入十個）そのくらいでしたから、ちよろど一ボールで一か月使われているわけですね、一か月に吸う煙草は、この一ボールでは足りないわけです。それで鉄で切つてキセルで吸つたり、また巻き直して小さくして吸つたりしていました。

これは聞いた話ですけど、アメリカ兵に壕の中にいるのを撃たれて、他は死んでしまつて二人は残つたのがいますけれども、この人たちは壕の入口にいたので助かつて、奥にいるのは全部銃でやられていたそうです。それでこの人たちの話を聞いて見たら、このアメリカ兵が事務所（役所）の方から上つて来たところは全部やられたわけですね、壕を全部あきつて。

註、部落の前面で日本兵、避難民の男子を一列横隊に並べて、大量殺戮をアメリカ兵が行なつたというのを、聞いた人がいる、ということ語つていられるが見た人から聞いたのではない。

この真否は国吉部落の座談会でもはっきり掴まれなかった。

国吉部落では、出て来い、出て来いというので壕から出て、怒つて石をさがして、それをアメリカ兵に投げつけたので、石だからアメリカ兵は当つても何でもなかったが、反対にやられて死んだ人の家族も現にいます。

それから疎開して行つて、命を助かりに行つてゐる気持とね、果して帰つて来たら自分の同級生とか、残つてゐる人たちが怨みはないかという気持と、すまないというような気持ちを持つていま